秋水通信

第30号

2021.10.1

幸徳秋水を顕彰する会
〒787-0010 四万十市古津賀4-41
四万十市生涯学習課内
ホームページ
http://www.shuusui.com/
090-6827-9129（田中全）
メール:zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp

秋水非戦の碑 ――11月3日除幕式――

幸徳秋水生誕150年記念事業として取り組んでいる「秋水非戦の碑」の完成除幕式を11月3日（文化の日）に行います。

記念事業は昨年6月顕彰会総会で決定し、事業費の調達のため会員ほか広く寄付を募っているところですが、多くのみなさまのご協力により、すでに目標を達成しています。

11月3日のスケジュール。

13時　除幕式　正福寺境内

14時30分　記念講演、交流会（2時間程度）

会場　市立文化センター大会議室

講師　山泉進　大逆事件の真実をあきらかにする会事務局長、明治大学名誉教授

演題　幸徳秋水の遺産（レガシー）
―生誕150年を記念して―

＊コロナ禍の中、飲食を伴なう交流会は開きません。

併せて、四万十市は記念展示を市立郷土博物館で10月27日から来年1月24日まで開催し、市所蔵の秋水遺墨や書簡などを公開します。

また、市立図書館内の秋水資料室（常設）も10月中旬から展示の入れ替え（リニューアル）を行います。除幕式参加者はぜひ一緒にごらんください。

秋水の誕生日は1871（明治4）年11月5日。11月3日は1946年、秋水がめざした非戦の理念をかかげた日本国憲法が公布された日です。

また、明治時代は天長節（天皇誕生日）、昭和前期は明治節とされており、無期懲役とされた坂本清馬が24年間の獄中生活から仮釈放されたのも1934年のこの日です。

碑文

吾人は飽まで戰爭を非認す
之を道德に見て恐る可きの罪惡也
之を政治に見て恐る可きの害毒也
之を經濟に見て恐る可きの損失也
社會の正義は之が爲めに破壞され
萬民の利福は之が爲めに蹂躙せらる
吾人は飽まで戰爭を非認し
之が防止を絶叫せざる可らず

幸德秋水

平民新聞　一九〇四年一月十七日

1月24日　墓前祭開催
秋水生誕150年、刑死110年

今年の1月24日は雨となった。コロナ禍の中、県外からの参加はなかったが、10年刻みの節目の年ということもあって、地元だけで例年より多い約90人の参加があった。

例年通り正午0時半開会。最初に顕彰会の宮本博行会長が献花したあと追悼文を朗読した。

続いて幸徳家縁者の木戸秀雄さん、田中和夫さん、長尾正記さんが献花。

さらに、四万十市長、市議会議長（副議長）、教育長、中村商工会議所（専務）、中村地区労、中村九条の会、正福寺住職、地元県議、高知市自由民権友の会の代表が次々に献花。

そのあと秋水作漢詩の吟詠と地元で歌われている演歌「幸徳秋水」の披露。

吟詠は獄中二作。地元吟詠会の中尾幸三氏が「母多治宛」を、森景信氏が絶筆となった「偶成」を詠った。

白菊を献花

演歌「幸徳秋水」は吉岡和昭氏作詞で、作曲者の宮本多仁男氏がカラオケでマイクを握った。

時は明治の　中村町に
産声をあげた　貴方の使命
誠賢い　少年を
駆り立てる　自由民権
人の為世の為　尽くす人生ですか
有難う　有難う　幸徳秋水

演歌「幸徳秋水」は有線カラオケにも収録されているので全国どこでも歌え、CDもつくられている。（希望者は顕彰会まで）

墓前祭のあとは、例年は文化センターで記念講演会を行うが、今年はコロナのため中止した。

異例の墓前祭となったが、みなコロナ禍の早い終息を願って散会した。

雨の中の参列者

秋水非戦の碑へ寄付、顕彰会に入会された4人から寄稿をいただきました。
皆様からの寄稿もお待ちしています。

今だからこそ非戦の誓いを　二度と過ちは許されない！

福岡県みやこ町　畑中茂広

皆さんつつがなく、お元気ですか？「新型コロナ禍」での今次、時の挨拶は特にこんな気持ちになります。世界的パンデミックになっている現状と、その中で何の有効な手も打てないまま実施した東京オリンピック・パラリンピック。主権者である国民の「いのちと暮らし」よりも「経済優先」「国のメンツ死守」の政府の姿勢と「だまし」の手法は、まさに明治維新後の我国の「文明開化」から「富国強兵」「海外侵略」「太平洋戦争への突入」、そして「敗戦」という、つい150年前にたどってきた方途に似ている気がしてなりません。

敗戦後76年。1945年(昭和20年)がちょうど折り返し点となりますが、折り返してもなお同じような道を歩んでいるのはなぜか？そんなことを考えている昨今です。

前文が長くなりましたが、はじめまして。私は福岡県京都郡みやこ町豊津の畑中茂広と申します。私が生まれ育った「豊津」から、堺利彦という偉大な社会運動家が生まれました。氏は幸徳秋水氏とほぼ同じ時期の生まれで、中央での活動を共にされ、日本における「平和主義」をその心身を挺して実践された大先輩です。

氏から遅れること82年、私は豊津町に生を受けました。以来、氏の母校でもあり多くの軍人、偉人を輩出した旧制豊津中学校・豊津高校（現在は、県立育徳館中学校・高校）を卒業しました。高校入学でまず教わることは「文武両道」「錦陵魂」であり、維新後の小笠原藩校の誇りとその歴史の一つ一つでした。多感な青春時代を田舎の高校で学んだ後大学進学と共に、世の中の不条理に疑問を持ちつつ就職先を福岡県職員に求め、労働組合運動に没頭するようになりました。その後、「地域づくりこそ」との思いで県の職員を辞し、46歳で豊津町長選挙に無謀にも挑戦（1998年）。運良く78票差で当選。その後、7年と10か月、介護保険法の実践、貧乏町の町政改革を思う存分させていただき、町村合併と「基礎自治体の自立」を今一つの使命と思い合併実現（平成18年）。54歳でプータロー。その後4年間の浪人生活（と言っても生活がありますので本業の薬剤師として4年間病院薬局勤務。胃の腑が痛い日々でしたがやりがいを感じた日々でもありました）を経て、現在福岡県議会議員3期目を務めています。

町長時代の2004年、中村市（現四万十市）訪問、平民社百年集会でお話しをさせていただきました。幸徳秋水氏の墓参りと集会後の酒盛りは今でも良い思い出として残っています。

この度、幸徳秋水氏の「非戦の碑」除幕にあたり、田中全事務局長さんのご好意でこうした駄文を掲載していただくことになり、改めて堺利彦誕生の地と幸徳秋水誕生の地に現在生活する者として、心を同じくする同士の念を強めております。「二度とふたたび、間違いは許されません」。これからも永久に「平和」な国と世界を希求し、活動し続けたいと思います。

結びに、改めて、世界の恒久平和と皆様方のご健勝を心からご祈念申し上げます。

十一月三日は秋水非戦の碑の除幕式

札幌市　嵩　文彦

私の父は和歌山県新宮の出身で、新宮中学では佐藤春夫の弟、夏樹と同級でした。名古屋の専門学校を終えたあと、しばらくして北海道に渡りました。事情があって、父と私は四十歳以上年齢が違いますが、折につけ新宮を揺るがせた佐藤春夫の無期停学事件のことや日本中を震撼させた「大逆事件」の片々は耳にしておりました。

深く関心を持つようになったのは、大学にはいって文学にかかわるようになってからのことです。初めは新宮グループの中心人物、医師大石誠之助のことを中心に本を読みました。やがて元老山県有朋がもっとも危険視、敵視していたのが幸徳秋水だったとわかりました。

いろいろ本を読んでゆきますと元老山県有朋が明治政府のうえに立って独断的に強硬策をとって来たのがわかります。山県有朋が明治四十二年十一月三日に宮下太吉が山中でおこなった小さな爆裂弾の実験（明科事件）を拡大させてすべてをそこに結び付けて、無政府主義者・社会主義者らを一斉に検挙する計画を策定した張本人と知りました。

また、山県有朋は明治天皇に『社会破壊主義論』を提出し厳格な事後処理、治安対策強化を提起し、事件の処分に権限をもつ司法高級官僚に威圧と激励を与えたというのです。

さらに、山県有朋は永錫会という秘密の諮問機関をもち、「大逆事件」で死刑と判決されたひとたちのうちだれを無期懲役に減刑するかということも、この会で決定されたことも知りました。

幸徳秋水は一八九四年フランスで起こったドレフュス事件で無実の罪を着せられたドレフュスのために戦ったエミール・ゾラをほめたたえました。「エミール・ゾラは蹶然として起てり、彼が火の如く花の如き大文字は、淋漓たる熱血を仏国四千万の驀頭に注ぎ来れる也。」ゾラの言動がジャーナリズムを動かし国民の運動につながり、ドレフュスの判決は覆されました。

ところが日本では、当たり前の判決として粛々と受け止められ、だれも「大逆事件」が明治政府によるフレーム・アップであるとは思わなかったのです。「主義者」が本当に天皇の命を奪おうと行動を起こしたのだと信じられ、逮捕された人たちの家族は迫害され石をもて追われたのです。

このフランスと日本の国民の対応の差はどこからきたのでしょう。フランスは長い革命の混乱を乗り越えてきましたが、それによって自由・平等・博愛が国家の基本理念とされました。明治時代の日本人の意識はまだ幕藩体制から自由にはなっておりませんでした

いまCOVID-19（新型コロナウイルス）の流行の最中、「同調圧力」という言葉が新聞紙上を賑わし、ムラ社会の残存を露呈させました。

国民自らの力で「人権宣言」を行ったフランスと、占領国から「自然」に与えられた国民の意識の差がここでも認められているようです。

個と個が平等に互いの生存を認め合い「共に生きる」、それを実践し気長にやってゆくよりないと思います。

杉並で秋水、平民新聞の非戦の志を受け継ぐ

東京都杉並区　岩﨑健一

杉並区は東京西郊にあり、１９３３年に虐殺された小林多喜二、敗戦の前後に獄死した戸坂潤、三木清が住んだ町である。杉並の平和・民主運動は１２０年前の秋水、平民新聞の非戦のたたかいと深く結びついている。

関東大震災後の１９２６年、中野・杉並地域に移り住んだ文化人たちが西郊共働社（後の城西消費組合）を設立した。その中心には新居格（組合長）、奥むめお、与謝野晶子（翌年、家庭会会長）らとともに鳥取県岩美町出身の橋浦康雄と時雄の兄弟がいた。

橋浦康雄は画家、民俗学者で、この頃はすでにプロレタリア芸術連盟（プロ芸）中央委員長として活躍し、弟の時雄は社会主義者として闘っていた。

橋浦兄弟の原点には少年時代、日露戦争のさ中の平民新聞との出会いがある。二人は１０人兄弟の４男と５男。康雄は自伝「五塵録」で１９０４年、兄たちが家に持ち帰った平民新聞の「読みかす」を「拾い読み」し、「そこには戦争に反対する激しい文句の数々が記されてあった」と回想している。時雄は鳥取中学時代に平民新聞の熱心な読者になり数人の中学生と読者グループをつくった。

康雄はしばらく地元で暮らしたが、先に上京して早稲田の予科に進んだ時雄は秋水に会って社会主義研究会に参加した。康雄は時雄が持ち帰った「社会主義神髄」や「共産党宣言」を読み、「これらの書物の中には、ところどころ砂金のように、あるいは鋭い針の心胆を刺しつらぬく文句がふくまれていた」と振り返っている。

時雄は大逆事件後、郷里の「因伯時報」に秋水弁護の一文を投稿したため逮捕され、その時に没収された日記中に「天皇の顔のことを竜眼うるわしくというが、本庄の村上の土蔵のしっくい細工の竜の顔とそっくりよく似ている」との一節が不敬罪とされ、投書の新聞紙法違反禁固四か月に不敬罪五年の刑を受け投獄された。

康雄が初めて上京した１９１２年９月、大赦令により出獄する時雄を千葉刑務所に出迎えたとき、同時に出獄した片山潜や堺利彦に初めて出会う。

１９２９年、東京市では大規模なガス料金値下げ運動が展開された。西郊共働社は野方町政研究会とともに各所で演説会、町民大会を開き、康雄も西郊共働社代表として堺利彦と並んで演壇に立った。時雄はこの年の市議選に出馬した堺利彦の選対幹部としてたたかい、牛込区内最高点で見事当選を果たす。

１９３０年代、侵略戦争下に激しい弾圧を受けながらも城西消費組合は闘い抜いたが、１９４１年１０月、解散させられた。

敗戦直後、橋浦兄弟らは西部生活協同組合連合会（会長新居格、組織部長橋浦康雄）を結成、杉並でも各地域で生協が生活防衛の先頭に立ち、１９４７年、最初の杉並区長選挙で新居格を当選させた。

戦後杉並の原水禁署名運動など数々のたたかいには秋水の志を受け継ぐ思想水脈が滔々と流れている。わたしたちは折々の活動の中でこの先人たちのたたかいに学んできた。

結びに、師岡千代子について一言したい。獄中の秋水を支え「死水」をとった千代子のその後は苦難の連続であったが、戦後は杉並区高円寺で暮らし、１９６０年２月、この地で生を終えた。千代子も杉並ゆかりの先人である。

自我から自己へ

石川県七尾市　平義昌

私は、旅行に出ると、必ず、幸徳秋水、大杉栄、小林多喜二の墓を参ることにしている。私は無神論者であり、墓を建てる気はさらさら無いが、三者の墓を訪れるのは、墓の前に立つと緊張し、自らの日々の行動が反省されるからである。

私は明治大学の大学院で平野謙に師事してプロレタリア文学を研究した。それは、富山大学での学生時代、７０年安保闘争、連合赤軍の拷問虐殺事件、三島由紀夫の自衛隊突撃割腹事件があったからである。それらを機縁にして、自らの日々の行動を反省するようになった。

幸徳秋水、大杉栄、小林多喜二、プロレタリア文学者に共通しているのは、命を賭けて、戦争に反対したことである。彼らは、自分のステータスである自我を守るよりも、自分の思想と正義感による行動という自己を優先した。それが私の生きる手本になった。

私は２６歳から６０歳まで石川県の公立高校の国語の教諭であった。私のモットーは体罰反対、服装検査反対、生徒中心の進路指導であった。

私が教諭になった頃、校長派も組合派も同調して体罰を行っていた。しかし、文部科学省、教育委員会の指導が入ると、体罰が無くなった。校長派も組合派も権力に弱いのである。

高校でいじめ自殺事件があると、校長派も組合派も同調して隠蔽するのは、校長、教諭という自我を守るためである。

私が赴任した高校全てに服装検査があった。私が廃止を唱えると親しい教諭が一人もいなくなった。進学校で生徒中心の進路指導を進めると、すぐに異動させられた。進学校では学校のめんつを保つために生徒に意向を聞かず、有名大学に進学させるのである。

私は４９歳の時に、組合（石川県高等学校教職員組合）の定期大会で、約３００名を前に服装検査廃止を訴えた。賛成したのは養護教諭一人であった。

次の年も、組合の規約を守らない組合員は除名すべきだと訴えたが、賛成者は一人もいなかった。主任手当を組合に拠出しないのは、それを守ると校長になれなかったからである。

私は組合を脱退することにした。委員長が私を引き止めに訪れた。私は「２割のまともな組合員だけで運動を進めれば、むしろ力が発揮できる。」と言った。委員長は「まともな組合員は１割しかいない。その数では教育委員会に対抗できない。」と言った。物別れに終わった。

ある教師から「反校長派の平先生が組合をやめれば校長から不適格教師の烙印を押され学校から追い出されます」、元委員長から「平先生のような自分の考えをしっかり持っている教師が組合に必要なのです」と言われたが、私は組合を脱退した。二人は去った。

私は不適格教師にはならなかったが、５１歳から定年まで、非行で荒れた実業高校に勤務させられた。体制に異を唱えることに対する教育委員会の嫌がらせである。実業高校が荒れるのは、教育カリキュラムが生徒に合っていないことが主因である。

私は教科書を離れて授業した。校長は形式上叱ったが、妨害しなかった。事情を知っていたからである。

ガンジーは「あなたがすることのほとんどは無意味である。それでも、しなくてはならない。世界を変えるためではなく、世界によって、自分が変えられないようにするために。」と言った。私は非力ながら少しは貫けたと思う。

幸徳秋水と時代の転換

四万十市民大学講演（要旨）

東大史料編纂所教授　本郷和人

秋水資料室にて

ぼくは東大史料編纂所で鎌倉時代を専門に研究し資料集などをつくっていますが、残念ながら歴史学はいまの学生には、はやらない、人気がない学問になっています。なのに、研究者の多くは頭が固く、象牙の塔に立てこもっている。

ぼくは大好きな歴史学を多くの人にも好きになってほしいと思い、自分なりに考えて、文章を書いたり、テレビに出たりしています。講演に呼ばれれば喜んで行くようにしています。

さて、この中村は天皇家とは関係の深いところです。平安時代、天皇家に次ぐのは藤原家で四兄弟（南家、北家、式家、京家）いました。この中で最も力をもち本家筋となったのは道長、忠道が出た北家です。北家の中から近衛家（基実）と九条家（兼実）がおこります。

近衛家は平家と、九条家は源氏（頼朝）と手を組み、近衛家からは鷹司家が分家、九条家からは二条家と一条家が分家します。一条家の初代は兼実の孫の実経です。これらを五摂家といい、天皇に代わって政治を行う（摂関政治）ほどの実力をもっていました。

室町時代になると貴族（公家）たちは武士の台頭により京都では生活がしにくくなりました。そこで地方にある自分の領地に出向くようになり、中にはそのまま土着する者も現れてきました。応仁の乱を機に幡多荘のある中村へやってきた一条家はその代表であり、ここで戦国大名にまでなりました。

一条家が来たということはそれだけ土佐の国が豊かだったということでしょう。四国は二対二にはならず、山脈で分けられるので三対一です。幕末維新の歴史をみても土佐にはエネルギーがあった。土佐はおもしろい。

幸徳秋水は中村の裕福な商家に生まれ八歳で漢詩を書くほどの早熟、天才でした。十六歳で上京後中江兆民の書生になり、その後新聞記者になります。自由新聞を経て萬朝報記者のころ、田中正造に頼まれ足尾鉱毒事件にかかる天皇直訴文を書きます。当時、秋水は文筆家、名文を書く人として有名でした。斎藤緑雨などの文人とも広く交遊があった。

秋水はその後「帝国主義」などを出版し、社会主義者さらにアナキストになり、明治政府からマークされるようになる。政府は秋水を逮捕する口実がほしかったところ、管野須賀子が現れ不倫関係になったことでシメシメ、叩けばホコリが出た。天皇爆殺事件はざれごとですめばよかったが、須賀子ら四人は脇が甘かった。秋水は冤罪だったが逮捕され、たちまちみんな死刑にされた。

この大逆事件をぼくは歴史研究者として見過ごすことができません。というのもぼくはいま六十歳、あと五年で退官です。そろそろ自分の歴史学というものをまとめたいと思っています。そこで三つのことを計画しています。

一つは、自分の研究のど真ん中（直球）である自分なりの「日本中世史」をまとめること。

二つは、その前提になるのですが、日本人の考え方や行動のあり方について、世界の人とは違う日本人のオリジナリティのようなものをまとめること。これは『日本史の法則』という新書としてまもなく河出書房新社から出版します。

三つは、歴史学の歴史についてまとめたい。これをやらないと死ねません。ここに幸徳秋水が出てきます。

秋水は大逆事件の裁判の陳述において「みんな天皇、天皇というけれど、いまの天皇はどうせ北朝の子孫ではないか」という趣旨のことを言った。これが新聞に漏れたので、山縣有朋（元老）は真っ青になった。

秋水は正しいことを言った。しかし、当時は南朝が正統であり今に続いているということになっていた。

この学説は水戸光圀らによってつくられた水戸学によるもので、幕末の尊王攘夷思想＝討幕の根幹になっており明治にも引き継がれた。明治のエライ人たちは後醍醐天皇のために死ぬまで戦い続けた楠木正成のようになりたかったのだと思います。そんな情念世界があった。

当時、日本の天皇は万世一系だということが世界に向けての売りであった。いまでも世界の中で英語のエンペラーは天皇だけであり、他はみなキングです。

当時でも学問の世界では明治天皇は北朝の子孫だということには気づいていたが、それを秋水が言ったものだから、それなら明治天皇はニセモノだということになる。大変なことになった。

山縣有朋はこの問題をなんとかしろと圧力をかけてきた。山縣からすれば南朝が正統なのだから、南北朝はおかしい、吉野朝時代にしろなどと。

明治の歴史学の基本は実証主義でした。日本のように古文書が多く残っている国は世界のどこにもありません。ですから、証拠を調べろ、自分勝手に解釈してはいけないというものでした。

平民宰相と言われた原敬の日記が残っています。そこには山縣有朋の第一の子分であり三回首相になった桂太郎のことが書かれています。原敬が桂に天皇の研究をすることをどう思うかと聞いたところ、桂は学問として研究することはかまわんのではないかと答え、原もぼくもそう思うと言っています。

こんな雰囲気が大逆事件を機に一気に変わってくる。歴史の見方というものは政府の公認をえなければならなくなり、皇国史観というものが生まれてきました。

皇国史観の代表的学者＝指導者が平泉澄です。東京帝国大学の国史研究室の教授でぼくの三代前の先生になります。当時の歴史学は東大では今とは違い一番格が高かった。なのに、平泉は天孫降臨の高天原の神話も信じろ、「日本人なら神話を信じる以外にありえない」とまで言い切っています。本来「考えること」と「信じること」は別です。信じることは宗教です。

秋水刑死の翌年から大正になります。大正デモクラシーという言葉があり、憲政の常道とか、憲法（明治憲法ですが）が守られていた時代とか、なんとなく明るいイメージがあります。

しかし、歴史学で言えば、この時代から暗い影が落ちてきて、学問がダメになっていく、政治的に利用されていくのです。そのきっかけになったのが大逆事件なのです。その意味で大逆事件は歴史学の歴史において大変重大な事件だった。ぼくはここらへんの考え方を二、三年かけて構築していきたいと思っています。

（2021年7月20日
四万十市立文化センターで講演）